

平成30年6月12日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770300

研究課題名(和文) オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study of Tensions between Indigenous People and Sudanese Refugees in Multicultural Australia

研究代表者

栗田 梨津子 (Kurita, Ritsuko)

広島大学・総合科学研究科・助教

研究者番号：10632672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：(1) オーストラリア主流社会では、先住民とスーダン難民を白人の権威を脅かす存在として一括する黒人性(ブラックネス)という認識上のカテゴリーが形成されていた。両集団は黒人性をある程度内面化していたが、スーダン難民の間では、黒人性から距離を置き、膚の色以外での白人性を積極的に獲得しようとする動きが見られた。(2) その結果、多文化主義下での両集団に対する白人の評判において、主流社会への適応の努力という点で、先住民よりもスーダン人の方が勝っていたことが両集団間の緊張関係の一因となりつつあること、そのことが白人性のさらなる強化をもたらしていることが一定程度明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Indigenous and Sudanese Australians are viewed as those who threaten the authority of whites in multicultural Australian society. The epistemological category of "blackness" appeared, which encompasses both groups, in contrast with "white," in the process of social exclusion through racism. While both groups experienced "blackness," Sudanese people considered themselves outside the black racial identity, and attempted to acquire some degree of whiteness through social integration. Consequently, it became clear that both are in competition for the reputation in mainstream society. Relatively better reputation of Sudanese people in terms of the efforts for social integration became one of the factors of tension between the groups, which further strengthened the authority of whites, who remain in charge of maintaining the order in multicultural Australian society.

研究分野：文化人類学

キーワード：先住民 スーダン難民 多文化主義 オーストラリア 黒人性

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の全体構想は、1990年代以降、新自由主義の台頭と共に、多文化主義の後退が叫ばれてきたオーストラリア社会において、一度否定されたはずの人種主義への回帰が生じているという現状を踏まえ、白人主流社会において「ブラック」として人種化され、社会の最底辺に置かれたスーダン難民と先住民の緊張関係への着目を通して、多文化主義の下で人種的差異が維持・再生産されるメカニズムについて考察すること、さらに、両集団間の関係の分析を通して、オーストラリア多文化主義下ではたらく人類普遍の規準としての白人性の特性を逆照射することであった。

(2)その中での本研究の具体的な目的は、両集団間の緊張関係をもたらす諸要因について、両集団をめぐる歴史的・文化的背景、現在の政治的、社会経済的状况を踏まえながら明らかにすること、さらにそれらの要因が多文化主義に内在する白人性の問題といかに関連しているのかを考察することであった。多文化主義を白人、エスニック集団、先住民という三者関係として捉え直すことで、多文化主義下の民族間関係をめぐる人類学的研究に資することを最終的な目標とした。

2. 研究の目的

(1)1990年代以降の多文化主義政策における先住民およびアフリカ系難民の位置付け、同政策の下で両集団に提供される社会福祉支援の実態、および現在のオーストラリア社会において両集団がおかれた政治的、社会経済的状况を把握した上で、両集団間に緊張関係をもたらした諸要因を明らかにすること。

(2)メディアを中心に形成された主流社会における先住民およびスーダン難民に対するイメージが両集団の自己認識や互いの集団に対する態度に与えた影響を明らかにすること。特に、主流社会で構築された両集団を一括する「ブラック」というカテゴリーへの両集団の対応を比較し、それが集団間関係に及ぼした影響について考察すること。

(3)(1)と(2)で明らかになった先住民およびスーダン難民の緊張関係の諸要因を、白人主流社会における両集団に対する評判という観点から考察し、多文化主義の下で白人性が維持、強化されるメカニズムを解明すること。その上で、反多文化主義の時代におけるマイノリティ集団の支配の構図に関する新たな理論的視座を構築すること。

3. 研究の方法

(1)上記の研究目的を達成するための研究方法は、主に、日本およびオーストラリアにおける文献研究、オーストラリア、アデレードでの現地調査、そしてそれに基づく国内外の学会での発表、ならびに学会誌等への論文の執筆が中心となった。

(2)文献研究は、国立民族学博物館図書室、アデレード大学図書館、南オーストラリア州立図書館にて、多文化国家における人種・エスニック集団関係および白人性に関する文献を収集し、研究を行う上で基礎となる理論的視座を構築した。さらに、両集団に対する政策の変遷および主流社会における両集団の受け止められ方に関する文献や新聞記事の収集を行った。

(3)現地調査は、先住民およびスーダン難民の人口の割合が相対的に高い南オーストラリア州、州都アデレード北部および北西部郊外にて実施した。具体的には以下の通りである。

政府系・非政府系の難民支援組織および先住民組織、スーダン難民への支援を提供している教会、コミュニティセンターでの両集団の関係に関する聞き取り調査

スーダン難民と関わりのある先住民および先住民と関わりのあるスーダン難民に対する互いの集団との経験および白人主流社会の人々との経験、ならびに「ブラック」としての自己認識に関する聞き取り調査

先住民とスーダン難民の社交の場であるスポーツクラブおよび若者のための社交クラブでの参与観察および両集団間の関係に関する聞き取り調査

4. 研究成果

(1)オーストラリアにおける対スーダン難民および先住民政策は2000年代以降、後退傾向にあることが文献研究から明らかになった。2000年代初頭、人道的支援プログラムの下で大量のアフリカ難民が優先的に受け入れられていたが、2000年代後半からスーダン難民はオーストラリア主流社会への適応が困難であるという理由から、アフリカ難民の受け入れ人数が削減されるに至った。

先住民については、1990年代以降、ナショナル・アイデンティティ構築の過程で先住民の文化が国民的遺産として称賛された一方で、和解政策の下で非先住民との格差是正に向けて、先住民を賃金労働者として主流社会へ組み込もうとする動きもみられ、同化主義的な性質が強まっているといえる。

両集団は共に、失業率の高さや収入の低さといった問題に直面していたが、その背後には主流社会における両集団への偏見や差別が存在した。このように両集団は社会的排除の経験を共有する一方で、雇用や住宅に関する社会福祉サービスでは、格差是正政策の下で先住民のみを対象としたサービスが提供されるなど、先住民の方が優遇されていたといえる。こうした社会的資源の分配をめぐる、一部の先住民およびスーダン難民の間では互いの集団に対する否定的な態度がみられたが、そのような態度は個人レベルに留まり、集団レベルでの緊張関係をもたらすまでには至っていないことが明らかになった。

(2) 両集団は、先住民と難民という異なる属性を有するにもかかわらず、主流社会のメディアでは、共に暴力や犯罪に結び付けられ、社会の秩序を乱し、白人の権威を脅かす管理不可能な他者として描かれた。そこには秩序と自己統制を重視する白人性(「ホワイトネス」と対極にある黒人性(「ブラックネス」という認識上のカテゴリーが立ち現れていた。

このような両集団を包括する「ブラックネス」とそれに付随する否定的なイメージは、両集団に対する主流社会の態度にも影響を及ぼし、それは両集団の若者に対する警察による過剰な取り締まりという形で表れることもあった。さらに、白人性からの逸脱として構築された「ブラックネス」は、メディア表象だけでなく、両集団の当事者の間でも内面化されていた。以上から、両集団は当初から「ブラック」として人種化されていたのではなく、メディアにおける否定的な表象およびそれに伴う現実の世界での社会的排除の過程で、「ブラックネス」が構築的に立ち現れたと考えることができる。

現地調査を通して、「ブラックネス」への対応は、先住民とスーダン難民の間で差異があることが明らかになりつつある。たとえば、先住民の中には、スーダン難民との間に膚の黒さをはじめとする「ブラック」としての共通性が暗示されるケースがみられたのに対し、スーダン難民の側は、そのような共通性に戸惑いをみせ、「ブラックネス」からも先住民からも距離を置く姿勢がみられた。このことは、特に、英語力やオーストラリア社会への貢献を通して主流社会への適応度の高さを強調する、比較的高学歴のスーダン人の中で顕著であった。彼らにとって、「ブラックネス」は、自己のアイデンティティの核となるどころか、社会適応を阻むものとみなされていた。特に、アフリカ難民の受け入れ数削減の発表により、オーストラリア社会における自分達の位置づけが不安定になる中で、膚の黒さといった可視性に基づく差異は、彼らにとって不問に付したいものと認識されていることがわかった。

(3) このように両集団は貧困や差別による社会的排除を経験し、主流社会において白人の社会秩序への脅威とみなされる一方で、地方メディアにおける両集団の表象や両集団との関わりのある白人住民の語りから、白人による両者の受け止められ方には差異もみられることが一程度明らかになった。

たとえば、メディアにおいて、先住民による犯罪に関する記事では、先住民が主流社会に適応しようとし「純粋な悪」として描かれる傾向があるのに対し、スーダン難民による犯罪の場合は、その原因が母国での内戦や難民キャンプでの生活の中で形成された暴力的な文化に由来するものとして説明され、スーダン人が置かれた状況に対して同情し、彼らを擁護・支援しようとする見方も提示された。また、オーストラリアで先住民との和解が推し進められる中で、先住民が依然として歴史的不正や主流社会におけるレイシズムの存在を暴き出す存在として否定的に描写されるのに対し、スーダン人に関しては教会関係者をはじめとする白人住民からの支援に謝意を示し、主流社会への貢献を通して返礼を試みる姿が好意的に描かれることもあった。このようにスーダン難民に同情し、支援を提供する白人対支援を受け、白人に感謝するスーダン難民という図式は、オーストラリアが国際社会に対して提示している人道主義的な国家としてのイメージの維持・強化に寄与するものあり、オーストラリア市民にとって心地よい内容であった。

また、両集団との関わりをもつ白人の間でも、主流社会への適応の努力という点では、先住民よりもスーダン人の方が肯定的な評価を得ていた。特に、先住民はスーダン人よりも社会福祉サービスにおいて優遇されているにもかかわらず、怠慢で、職に就かないのに対し、スーダン人は職種を選ばず勤勉に働き、主流社会へ貢献しようとしているとして、両者が対比的に捉えられることもあった。ここで白人による先住民とスーダン人に対する評価を分けたのは、国家が期待するマイノリティ像(すなわち、白人によって管理可能なマイノリティとしてのイメージ)に合致しているか否か、そして勤労を通じた主流社会への「適応」に向けた努力の有無であった。

特に、勤勉さは、膚の白さ、英語話者やキリスト教徒であることと並んで、オーストラリアの白人性を構成する一つの要素とみなされ、その意味でスーダン人は、その膚の黒さゆえに現実の社会では排除されつつも、文化的価値観や行動様式という面では部分的に白人性を有する存在としてみなされていた。主流社会での自集団に対するイメージや評判の悪化を懸念するスーダン人の間では、膚の色以外での白人性を積極的に獲得しようとする試みがみられ、そのことが白人性のさらなる強化をもたらしていることが一程度明らかになった。

(4) 上記の成果は、多文化主義とマイノリティ集団に関する研究に新たな知見をもたらすのみならず、日本でも社会的関心が高まりつつある、難民の移住先での受容や認識のされ方について重要な視点をもたらすものである。

(5) しかし一方で、オーストラリアにおける先住民およびスーダン人の社会・文化的状況は多岐にわたるため、本研究期間中に両集団をめぐって得られた情報は限られたものであった。そのため、今後は以下の点にも着目する必要がある。

先住民とスーダン人の間には個人レベルでの対立や衝突がみられる一方で、近所付き合いや婚姻などを通じた友好関係が築かれるケースもみられた。そのため、両集団間の緊張関係だけでなく、連帯の諸相と要因についても明らかにする必要があるのである。

主流社会において「ブラック」とカテゴライズされる人々には、先住民とスーダン人のみならず、サブサハラのアフリカ人も含まれるため、これらの人々も考察の対象に入れ、「ブラックネス」の多様性を考察する。

本研究期間ではアデレードでの調査に限られていたが、スーダン人の受入れ率の高い他都市でも同様の調査を行い、比較を通して議論の一般化を図る。

今後は、上記の点を視野に入れつつ、さらなる文献研究、現地調査を行うことにより、多文化主義を白人、エスニック集団、先住民という三者関係から捉え、多文化主義とマイノリティ集団間関係についての理論化を進め、成果の公表を続けていくつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

栗田梨津子

「古典的人種主義と新人種主義の狭間で - オーストラリアにおける先住民およびスーダン人の「ブラックネス」をめぐる考察」(研究ノート)査読有、『文化人類学』82巻4号、PP.557-566, 2018

栗田梨津子

「メディアにおける先住民とスーダン難民の描写に関する考察 - アデレードを事例に」(研究ノート)査読有、『オーストラリア・アジア研究紀要』1号、PP.43-50, 2017

栗田梨津子

「新自由主義と先住民性の揺らぎ - アデレード北西部郊外の人種関係の事例から - 」『オーストラリア研究』、査読有、第29号、PP.1-15, 2016

Ritsuko Kurita

“Identity Negotiation among Indigenous Youth in Adelaide: Towards the Use of Both Essentialising and Hybridising Strategies,” *Journal of Australian Studies*, Peer Reviewed, vol. 28, pp.19-35, 2015

〔学会発表〕(計4件)

Ritsuko Kurita

“Entanglement of Indigeneity with Class and Locality: The Case of North Western Adelaide,” Race, Whiteness and Indigeneity International Conference, 2017年6月6日、クラウンプラザホテル(オーストラリア)

Ritsuko Kurita

“‘Being Black’ in Multicultural Australia: Description of Indigenous and Sudanese Peoples in the Australian Media,” International Australian Studies Association Conference, 2016年12月8日、ノートルダム大学(オーストラリア)

栗田梨津子

「新自由主義と先住民性の揺らぎ - アデレード北西部郊外における人種関係を事例に」オーストラリア学会第26回全国研究大会シンポジウム「新自由主義時代のオーストラリアにおける差異/境界と社会統合」2015年6月1日、慶応義塾大学

Ritsuko Kurita

“Indigenous Youth and Identity Negotiation in an Urban Setting: Life Experiences of ‘Mixed-Blood’ Indigenous People in Adelaide,” オーストラリア学会25周年記念国際大会、2014年7月2日、上智大学

〔図書〕(計2件)

栗田梨津子

『多文化国家オーストラリアの都市先住民アイデンティティの支配に対する交渉と抵抗 - 』(全352頁) 明石書店、2018年

栗田梨津子

「オーストラリア先住民と教育」山内由理子編『オーストラリア先住民と日本 = Indigenous Australia and Japan : 先住民学・交流・表象』、PP. 206-225、御茶の水書房、2014年

〔その他〕

月刊情報誌 Wendy 広島版（2018年2月1日）
にて「豪州の多文化社会」に関するコラムを
執筆

6．研究組織

（1）研究代表者

栗田 梨津子(Kurita, Ritsuko)
広島大学・総合科学研究科・助教
研究者番号：10632672